

「風土」分科会では、「『あるもの探し』で発見!三遠南信の底力!」をテーマに意見交換がなされた。

コーディネーター	財団法人 阿智開発公社	理事長	羽場 睦美
報告者	天龍村柚餅子生産者組合	組合長	関 京子
行政	豊橋市	豊橋市長	佐原 光一
行政	豊川市	豊川市長	山脇 実
行政	田原市	田原市長	鈴木 克幸
行政	松川町	松川町長	深津 徹
行政	天龍村	天龍村長	大平 巖
経済	蒲郡商工会議所	蒲郡商工会議所会頭	小池 高弘
経済	泰阜村商工会	泰阜村商工会長	秦 和陽児
経済	喬木村商工会	喬木村商工会長	藤本 芳男
住民	三遠南信地域を学ぶ会	会長	仲井 政弘
住民	みらい企画 律	代表	矢澤 律子
パネリスト	九州経済フォーラム	理事	西座 聖樹

(敬称略)

■はじめに



コーディネーター／

一般財団法人阿智開発公社 羽場理事長

皆様、こんにちは。ただいまご紹介にあずかりました羽場でございます。本日、コーディネーターを務めさせていただきます

ですので、よろしくお願いいたします。

本日は、佐原豊橋市長を初め3市の首長さん、町長さん、村長さん、それから商工会議所、商工会、あるいは民間団体の皆様にお集まりを賜りまして、これから約1時間45分にわたりまして風土部会のワークグループを進めさせていただきます。

今日の主な流れですが、最初に前年度サミットの議論のまとめ、そして、今回のテーマについて、事務局から説明をいただきます。

次に、今日の基調報告でございますが、天龍村柚餅子生産者組合の関京子様より、「ゆべしづくりから三遠南信交流へ」というタイトルでご報告いただきます。

この講演を踏まえまして、今日のテーマでございますが、魅力的なタイトルになっております。『「あるもの探し」で発見！三遠南信の底力！』ということでございます。お手元の皆様の資料の封筒の中に三遠南信サミットのこの資料集が入っているかと思っておりますが、この50ページをお開きいただきたいと思っております。また事務局から説明がありますが、ここに三遠南信のプロジェクトの全体図が書いてあり、私どもはこの中の一角を占めるわけです。それもあわせて後ほど説明があるかと思っておりますので、私たちのミッションに沿って、この中の議論をしていくということになります。

それでは、事務局より説明をお願いいたします。

事務局

それでは、前年度の議論について、ご説明します。

前年議論でございますが、大きくは内容を三つのポイントにまとめることができます。

まず、その一つ目ですが、従来の丁寧な口コミに加えて、B-1グランプリなどに代表されるイベントやフェイスブックなどを利用した新しい情報戦略が必要となり、これまで以上に三遠南信地域が情報発信力を強化することが大事であること。

二つ目は、民間行政を初め、それ以外のさまざまなセクターとネットワークを構築し、強固な情報網をつくっていくことが大事であること。

最後、三つ目でございますが、三遠南信地域の基盤づくりに向けて地域ブランドを確立し、それをさまざまな産業に広げていく。そうした中の一つとして「風土」の戦略が役立つであろうこと。

そのように3点、まとめることができました。

そして、今回の議論についてですが、前年度の議論を引き継ぎ、さらに発展的な意見交換を行います。私たちにとって、ふだんは余り気にしない、身近に存在する様々なものや事が、地域外の人から見れば、これが三遠南信地域の特異性、魅力と捉えられることがあります。言いかえますと、三遠南信が一つのブランドとして高い可能性を秘めている、そうしたことを踏まえまして『「あるもの探し」で発見！三遠南信の底力！』をテーマとして設定し、食べ物や物産、伝統文化など、地域にあるものを生かして、三遠南信の魅力を域外に対し、いかに存分にPRしていくかについて議論をしていただきたいと思います。

コーディネーター／

一般財団法人阿智開発公社 羽場理事長

ありがとうございました。

以上のように、SENA事務局が今回の「風土」のテーマを明確に定めていただきました。それに沿って進めていくわけですが、皆様の議論に進む前に、参考となります先行事例ということで、先ほど申し上げましたが、天龍村の柚餅子生産者組合の関京子様より、「ゆべしづくりから三遠南信交流へ」というタイトルで基調報告をいただきたいと思っております。

それでは、関様、よろしく申し上げます。

■報告

天龍村柚餅子生産者組合 関組合長

今までやってまいりましたことは40年ちょっと超えていますので、15分でお話しするといっても、本当にさわりだけかと思っておりますが、おかげさまで、三遠南信の皆様の交流のおかげで本日までやらせていただきました。

まず、最初の写真をご覧ください。

私たちが住んでいるところは、こういう

すごい山の中でございます。この下を流れているのが天竜川でございます。私どものところから2キロメートル下りますと、今は豊根村になりましたけれども、富山村でした。そして、その対岸が浜松市の水窪町になります。ですから、1時間あれば三遠南信をぐるりと回ることができるわけでございます。

ちょうどこの写真は対岸から見た私どもの住いでございます。800年余の歴史のある隠れ里であります。熊谷家伝記という古文書によると、今から600年ほど前に新田義貞の息子、熊谷丹甲貞直が開祖となっております。その前には、既に左善、阿閑というおじいさんとおばあさんが住んでおりました。木曾義仲が1177年に見えたときに、「ここら辺は何というところだ」と聞かれました。「信濃の領内ということしかわからない。」と答えると、では、1泊お世話になったお礼に、おじいさんとおばあさんの名前から、「ここらあたりを左閑辺とつけよう」と。そういうことで、昔は「左閑辺」ということになっておりました。

その横にきれいな桃の花が写っていますが、周りの山が全部岩場ですから、秋は紅葉が本当にきれいです。そして、春は山桜が、30メートルおきくらいに下から上へだんだん咲いて、周りが全部花ばかりになります。

訪れていただいた皆様が、「本当にこの花はきれいだ。品があって、何とも言えない良い花だ。」などと言っていただき、私ども、それも喜び、胸を張っています。

次の写真をご覧ください。

これは、皆様すでに御存じかもしれませんが、坂部の冬祭りと申しまして、その熊谷丹甲貞直から3代目の直吉が、「ここで神楽をすると、この地域が栄えていくよ。」という夢を見たことから始まったお祭りで、600年も延々と続けております。

1月4日の夕方から始まりまして、5日のお昼ころまで、徹夜で行います。今はもう過疎で14戸の24人しかおりません。お祭りも昔から全然手抜きをすることなく、丁寧にやっていますが、子どももいなくなりで実施は大変になっております。

しかし、このお祭りには、ここからよそに出た人たちの息子さんやその縁者が必ず来てくださり、その際、「おれは会社を首になっても、このお祭りだけは来たいのだ。」というようにおっしゃって、今でも続けていただいております。

次の写真は、メインのたいきり面でございます。それで、その向こうが、やはり冬祭りに出てくる天公鬼でございますが、私どもの柚餅子の名前を、この鬼様の名前からいただいて「天公鬼」とつけたわけでありまして。この字は全部、今、ここにいらっしゃいます大平村長が書いてくださって、皆さんが、「この字は何と読むのですか」と聞いてくださいます。そうすると、柚餅子とお祭りとセットでお話することができるわけです。そんなことでやらせていただいております。

次をお願いします。

これは、もう42年くらい前に、大平村長さんが教育委員会にいらっしゃったときに、公民館事業として村のくらしの総合展示会をやった中に柚餅子がありまして、私も地区外から嫁に来たものですから柚餅子は知らなかったわけですが、そこで柚餅子との出会いがありました。真っ黒い変な塊だなと思ったのですが、これを切っていただいたときの本当に品のいい香りと深い味に感動しました。そして、うちに帰りましてお母様にお聞きしましたら、「おらも昔はつくったんだ。」とのことでした。いろいろの生活がなくなると同時に、「もう今の衆はそんなものは食べないぞ。」ということでやめたというのです。いや、これはもった

いない。何とかして次の世代にもつないでいきたいと思います。一方、民俗学の先生にお聞きしたところ、これは武士の携帯食だったのだとのことでした。そういうものを踏まえた上で、保存食として天龍村地域の古いおうちでは昔から作られてきていたものなのです。

こうしてお豆を煮て、おみそをつくって、それを柚子の中に詰めてつくってきたんですけれども、加工所をつくるのに、私どもは若妻で構成していた昔の生活改善グループでやっておりまして、お金も知恵も何もありません。そこで、地域の希望者で組合をつくりまして、長野県と村にお願いをして施設をつくっていただきました。

そして工場ができたのですが、大量生産は何かできるようになりましたが、全く私ども素人ですから、今度は販売に本当に苦労しました。皆様に知っていただくために、一生懸命方々歩きました。最初は新宿の三越に行ったりしたんです。ところが物を売ったことがないものですから、恥ずかしくて、「いらっしやいませ。」なんていう言葉が出なかったんです。そんな恥ずかしさを重ねながら、今ではもう600回以上、あちこちのイベントに出させていきました。でも、私どもが出ていっても宿泊費も出ない、交通費も出ないと経済的に大変で、これではどうしようもないから、今みたいな車社会を踏まえて、今度は皆様に来ていただくようにしようと方向転換しました。出向いた時には一度も良い思いをしたことはありませんでしたが、でも、その時出会ったお客様たちとの話がきっかけで皆様が来ていただけるようになりました。そのようなこともあり、販売に出向いていたことは、やはり無駄ではなかったのかなど、思えるようになりました。

それにはやはり柚餅子だけですと商売になりませんので、販売と同時に新商品の開

発もしたわけです。まず、最初の販売は、冬祭りの売店で私どもがやっておりました店先で柚餅子を試食していただきました。そうしたら思いがけなく、東京から1,000個の注文が入ったんです。でも、私たちは全然設備を持っていないし、商売目的で柚餅子を作っていたわけではなかったものですから、それから慌てて、皆で相談して組合をつくりました。

そして、1年に1品ずつ何かつくっていいこうということになりました。まずは、柚子製品からつくっていいこうということで、柚子みそとか、柚子の中をくり抜きますので、それでジャムをつくったり、柚子ジュースをつくったり、柚子あめなど様々なものを作りました。そして仲間をだんだんつくって、とにかく健康にも良い物を目指して、地域の原材料ばかりを使ったわけでございます。ですから、余計に本当にお金がかかって大変で、儲けは出ないんです。でも、健康に良いということにこだわっていききたいということですずっとやってきました。そして、浜松市へ行ったり、豊橋市へ行ったり、東京とか名古屋、遠くは神戸まで行ってきました。

販売はなかなか良い状態にならないものですから、組合の者たちがみんな条件の良い方へ離れてしまったので大変な思いをしましたが、平成の初め頃に、今年5月に亡くなられた松田不秋先生と、新城市の清水良文さんがお見えになり、「関さん、私は今、三遠南信に夢中になっているところですが、どうか関さんも一緒になってやってくれないかねえ。」とお話をいただきました。今までは販売だけでお世話になってきましたが、いろいろな会に出させていただくようになりました。

引佐町のつみ草休養村で行われていた「めだかの学校」に入学させていただいたり、静岡県の農産加工のマイスターとして

お世話になり、県中を歩かせていただいて良い勉強をさせていただきました。今でもクリエイティブ浜松「中部協働センター」に販売だけでなく講座の方までお世話になっております。

豊橋市でも三遠南信を学ぶ会の皆さんと交流したり、中央図書館とか愛知大学の皆様にも色々としていただきました。

今年9月に「南信州交流の輪」の事業として、新・地域づくりフォーラムを開催した折に、豊橋市のカレーうどんの仕掛け人である鈴木恵子さんに基調講演を、長野市から料理研究家の横山タカ子先生をお願いして南信州でも何かブランドになるものを作りたいと良いヒントを得ることが出来ました。

この写真は多くの皆様が数多いお祭りや行事においでくださった時の様子でございます。小さな分校がもう閉校になりそうだという平成8年から秋風コンサートとかカタクリコンサートとして、浜松市や豊橋市、新城市の皆様がおいでくださり、毎年やってきました。

小さな分校からマスメディアにのって大きなコンサートになり、天竜川を上にと下にと流れて、「カネト合唱団」が飯田市にできるきっかけになりました。

大きなバスでおいでくださり、県道1号から林道は狭くて登れませんので、ピストン輸送で送迎をさせてもらい、村長さんに「道幅を広くしてください。」とお願いしているところです。

おいでいただくだけでは交流ではありませんので歴史めぐりやお祭り等にも行かせてもらい、あの写真は、細江町で主人が姫様道中の警護侍をやらせていただいた時の楽しんでいただいているところでございます。

この写真は「南信州交流の輪」の設立の時のもので、平成22年にここで行ったサミットの時のものです。私達の地域の事を、

私達よりも三遠南信を学ぶ会の浜松市や豊橋市の皆様の方が良く知っておられて本当に恥ずかしいなと感じていました。

松田先生から南信州でも勉強会を作るように言われてもいましたので、呼びかけをさせてもらい、飯田市にお世話になって24団体で発足しました。また、三県の地域住民ネットワーク協議会もできました。

この三遠南信地域には素晴らしいお祭りがたくさんございます。この地域の柳田国男先生をはじめ、折口信夫先生や渋沢敬三先生、早川孝太郎先生方が昔から目を向けてこられた日本の原風景とも言われています。国の無形文化財に指定されているお祭りが私達の誇りにもなっております。

今年は、「南信州交流の輪」の事業の一つとして、講座も4回やるようにし、第1回は南信州の花、植物について小林正明先生をお願いして実施しました。いつも知らずに見ている草や木、花が改めて素晴らしい物に見えるようになりました。第2回目は、桜井弘人先生をお願いして、お祭りについてスライド説明で民俗芸能の宝庫であることをつくづく知って深く重要性を感じました。第3回目は中央構造線について坂本正夫先生にお聞きして、現地まで行っての学習でなお驚きました。「九州から諏訪以東、日本列島を1,000キロ以上走る」・「約9,000万年前に発生したものである」などお聞きしました。

次の写真は松田先生と田中さんと私が写っておりますけれども、去年の6月1日に住民ネットワークの協議会ができた時のものです。松田先生は、そのときにはお元気でした。今日はお嬢さんがおいでくださっています。先生は「私は1軒、家が建てられるほど三遠南信にかけてきたよ。」とおっしゃっていました。本当に先生のご苦勞を思うと、もう少し生きていただきたかったと思います。このネットワークがで

きて、活動をもう少し見ていただき、ご指導いただきましたかったなと思って、今考えると、じーんときてしまいます。

こちらの写真は私どもの地元で元々あった分校で、その分校を使っていろいろやりたかったのですが、耐震検査したところ「使用不可」ということで、建てかえていただき、そして、地域活性化センターという施設にさせていただきました。そのおかげで、皆さんがお祭りとかいろいろな体験学習においでくださいます。坂部というところはお祭りが毎月のようにあります。祈りで生きてきたものですから。それで神様はぜいたくですから、旬のものを、採れたものをお供えするようになっております。だから、それを皆様にも召し上がりいただくようにつくらせていただいております。そうすると皆さんがおいしいなどと言ってくれるので、「神様がこういうおいしいものを食べていたのですよ。」と話をさせていただいております。私どものところはどんどん人口が減っていく一方ですが、全然暗くならないです。訪れていただく皆さんのおかげだと思っております。

この写真が今年9月14日の新・地域づくりフォーラムの様子です。鈴木恵子さんの基調講演と横山先生のお話と、最後には、お祭り街道で一生懸命活動しておられる伊東さんから、何とか飯田市と豊橋市まで国道151号を祭り街道としてつなげたいという活動報告がありました。市長さんもどうぞよろしくお願いいたします。

今、新城市長とはお話をさせていただいたそうなので、ぜひつないで、このお祭り街道を良い文化の道としていただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

次の写真は、その祭り街道弁当をつくるための活動の様子です。今までは、お祭りと食文化が別だったのです。これを今度は

お祭りと食文化をセットで何かしたいということから、「祭り街道弁当」をつくらうということから、横山先生においでいただき、試作をしていただいて、いろいろと検討したわけです。今年は勉強会なのですが、来年には、試食までもっていきたいと思っております。県の支援金をいただいて、その中で何とか良いものをつくり上げていきたいと思っております。お祭りがいっぱいありますので、それにちなんで、うまってお弁当の中に食文化として入れていきたい。そして、3年目には何とかそれが売り出せるようになったらうれしいなと思っておりますので、また皆様にいろいろとお世話になるかと思っております。よろしくお願いいたします。

上の写真の一番前の笑っているおばあちゃんは今年98歳で亡くなりましたけれども、生涯現役を目指して、元気でやってこられたのが本当にうれしかったと思っております。ちょうど田中知事さんがお帰りになった後に、皆で「よかったな」ということで撮った写真です。

下の写真は村長さんもおいでになります。村井知事さんもお越しくさって、そして旬のものを召し上がりいただきました。村井知事さんは料理がお好きだったので、いろいろ本当に喜んで、「おいしい」と言ってくさってうれしかったです。右の写真は総務大臣賞をいただきましたので、主人も裏方ばかりしてくれているので、一度くらい一緒に行きましょうということで、東京に行ってきた際の写真です。これらも私どもの力だけではどうしようもないのですが、多くの皆様のおかげで何とかやってみることができました。だから、今はイノシシとかシカのほうが多くなっているような状況ですが、でも暗くなることなく、三遠南信の皆様のおかげだと、そんなふうにして感謝申し上げております。

つたない発表で申しわけありません。よ

ろしくお願いいたします。ご清聴、ありがとうございました。



■意見交換

コーディネーター／

一般財団法人阿智開発公社 羽場理事長

関様、まことにありがとうございました。大変すばらしい発表をいただきまして、柚餅子を売っているのではなくて、歴史と文化と、そして、温かな天龍村の坂部の心を売っていらっしゃるのだと感じました。まさに6次産業だということを感じさせていただきました。

それでは、せっかくでございますので、ご質問、あるいはご意見等ございましたら、今の発表に対して、皆様のご発言をお願いしたいと思います。

フロアの方々でも結構でございます。

どうですか。特にないようであれば、次に参りますが。

鈴木市長、お願いいたします。

田原市 鈴木市長

大変すばらしい活動、試みだと本当に実感いたしました。継続して行動することの大事さがわかりましたし、もう一つはやはり広がりですよね。お祭りも広がっていくとする動きや、お祭りと食文化を積み重ねようとする動きなど、いろいろな面での広がりというのは、一番大事なことではないかと思えます。今、6次産業化で販売に大

変ご苦労されたというお話を聞きましたが、まさに、農商工連携とか6次産業化というのは、販売の得意な人を仲間に入れてやってもらうことが必要となります。三遠南信は豊かな地域ですので、またいろいろな面で活動の場があちらこちらで生まれてくると思いますので、それらをつなぎ合わせるものがこれから三遠南信の盛り上げにつながるのではないかという感じがしました。

ご苦労さまでした。また頑張ってください。

コーディネーター／

一般財団法人阿智開発公社 羽場理事長

ありがとうございました。

それでは、いよいよパネリストの方々からいろいろとご意見、ご議論をちょうだいしていきたいというふうに思います。

まず、事前に事務局のほうからパネリストの皆様にご意見を伺ってございます。その中で、この地域の資源の活用について、この地域からあるものを探していかに地域おこしをしていくか、あるいはプロモーションしていくかということについての全体のテーマの中で資源の活用事例、今は天龍村の事例を発表していただきましたけれども、各地にさまざまな宝が眠っているものと思いますので、ご発表いただきたいと思えます。

どんどん挙手をしていただいて、我が町、我が市、我が村の資源をご紹介賜りたいと思えます。

それでは、お伺いしたいと思います、いかがでしょうか。

泰阜村の秦様、お願いいたします。

泰阜商工会 秦会長

泰阜村は、商工会が中心になって源助かぶ菜の生産をして、漬物にして販売しております。この源助かぶ菜は、明治時代に愛

知県から種が行商に来ていた井上源助さんが広めたもので、最後、泰阜村金野に伝わったものです。

種をとりまして、9月の後半から収穫が始まり、12月にはそれを漬物にしているわけでございます。全国的には野沢菜の支持のほうが圧倒的で、源助といえば泰阜と言われるようにして行きたいと思っておりますので、ここで報告させていただきます。

コーディネーター／

一般財団法人阿智開発公社 羽場理事長

他地区はいかがでございましょうか。

豊川市 山脇市長

まず初めに、実は来月の9日、あと10日ほどしかありませんが、B-1グランプリの全国大会が豊川市で開催されます。今回ご参加いただいている商工会議所関係、信金関係、行政というようなたくさんの方のご支援とご協力、そしてまた、ボランティアとしての参加もいただきまして、着々と準備を進めているところです。今までのご協力に対しまして厚く御礼を申し上げたいと思います。

このB-1グランプリの全国大会の誘致でありますけれども、ちょうど6年前に私が市長選に出馬するころからになります。豊川といえば豊川稲荷ですが、正月の3日間は賑わうものの、それを過ぎると閑古鳥が鳴くという大変寂れた状況でした。一時は年間600万人という参拝者があると言われておりましたが、今は半分の300万人を切り、門前町の店舗もシャッター通りというような状況になってまいりました。そんな中で、豊川稲荷といえばいなり寿司だと考え、いなり寿司の地域ブランド化を進めることをマニフェストに掲げ、取り組み始めました。

平成20年に市役所内で若手職員を中心に

豊川ブランド研究会を組織しまして、ブランド化の手法などを研究しました。そして、平成21年にその提言の一つであるブランド化の推進組織として「いなり寿司で豊川市を盛りあげ隊」を設立しました。

その後、盛りあげ隊がB-1グランプリの主催団体である「ご当地グルメでまちおこし団体連絡協議会」、これは富士宮市にありますが、そこに加入しました。翌年の平成22年9月のB-1グランプリの厚木大会に初めて参加させていただき、6位という成績を収めることができ、全国的にも大変注目を浴びるようになりまして、そのころから豊川いなり寿司の認知度も向上してきたのではないかと考えております。もう2年前になりますが、平成23年9月に「中日本・東海B-1グランプリin豊川」という地域の大会を開催いたしまして、そのときに22万人という多くの方に来場していただきました。経済効果も12億円という結果になり、それを踏まえて、次は全国大会をぜひ豊川に誘致したいと手を挙げましたところ、豊川市に決定していただき、来月、11月9・10日に開催ということとなりました。これは皆様のまちおこしに対する思いにより、本当に一生懸命に盛り上げていただきました結果、開催できることとなったと思います。

天候も気になりますが、東三河地域の皆様方にも大変応援をしていただいておりますので、ぜひ成功させたいと思っております。今日は午前中のシンポジウムで八戸市さんが見えていました。八戸市さんは昨年のB-1グランプリの全国大会において優勝されていますので、お話を聞きたいと思っております。

コーディネーター／

一般財団法人阿智開発公社 羽場理事長

ありがとうございました。

昨年度は浜松市長の餃子戦争のお話で盛り上がりましたが、お隣のいなり寿司と餃子ということでだんだん話が盛り上がってまいりましたが、キーワードが「ブランド化」ということになってまいりました。今そんな話もございましたが、いかがでございましょうか。

蒲郡市の小池様、よろしく願いいたします。

蒲郡市商工会議所 小池会頭

今、豊川市のほうからB-1の話がありましたけれども、最初、この分科会で「風土」と聞いたときは、私は食かグルメの話かなと思って、そのくらい東三河では今、B-1グランプリに向けて盛り上がっております。お隣の豊橋市では、先ほどから話が出ているように「カレーうどん」。もう年間35万食以上出ているということで、本当に地域のうどん屋の売上も10%以上上がっているし、そういう意味ではすごく「食」に力をいれてやっておられる。豊橋市のカレーうどんもそうですし、田原市長もみえますけれども、「どんぶり街道」ということで、本当に井をいろいろなものを集めてやっていらっしゃる。蒲郡市もこのあいだ、「ガマゴリうどん」というのがうどんサミットでグランプリをとりまして、まだどこでも食べられませんが、商工会議所の青年部が開発して、応募したらグランプリとってしまったということで、これから急いでいろいろなところで食べられるようにしようと、そんなことを今やっている東三河です。

蒲郡市はもともと8年前に観光交流立市宣言をしまして、観光ビジョン推進委員会というものを作って、オール市民で観光という切り口のまちおこしをしようといろいろなプログラムを作りました。一つはおもてなしコンシェルジュ検定をやりながら、

交流ということもあって、おもてなしのスキルも学びながら検定をしようということで、もう800人以上合格者の方がおり、その中で、おもてなしコンシェルジュクラブというのをつくっております。観光情報の発信をしたり、お手伝いをしてくれたりという作業をやっていまして、今、その発展系のマイスター制度をつくろうとかいろいろやっています。蒲郡は観光地として年間500万人ぐらいいらっしゃいますし、温泉地ですから70万人以上泊まっています。

「市民との交流のところでおもてなしができるような組織があるといいね。」ということによってしております。

そのときに観光交流ウィークというか、初めは蒲郡市民の人にまず蒲郡の良さもわかってもらおうということになりました。地域の中で観光の話をしていると、日常で当たり前前は良いと言わないですね。外の地域と相対化してやってくれないと、日常の地域のものでも良いものというのはいろいろあるのですが、地域の中だけで話をしていると、良さが当たり前で出てこないということになる。そういった意味では、地域の方にまず知ってもらおうということを始めました。それが3年前から「オンパク」ということで、地域での楽しめるプログラムをつくろうと、「遊び100選」と称して100個のプログラムを1カ月ちょっとの間に市民、また観光業者を含めてやってきました。今年はそのエリアを広げて、もちろん東三河が中心ですけれども、三河全体に広げてプログラムを展開する「みかわdeオンパク」というのを、皆様の手元に資料を配付してありますけれども、そういったことをやってまいりました。

結局、いつも観光のことをやっていると思いますが、観光に来る人は、それぞれの市、行政区のボーダーなどは余り関係ないのです。蒲郡には来ますけれども、蒲郡市

に来るわけではないのです。だから、そういった意味では、なるべくその地域で楽しめるものを増やしていきながら、滞在時間を伸ばしてもらおう。

また、本当に来る人の期待を超えるような楽しみを提供できるかどうかというのが勝負ですから、そういった意味で、いろいろな観光客に対応できるプログラムをつくりながら、広域で、「楽しんでもらえる地域だね。」と言ってもらえる地域づくりをしていくというのが、結果として、その地域のブランド化に向かっていくのかと思います。

地域が広がれば、外に向かう発信力が増すのではないかと考えております。

松川町 深津町長

松川町というのは、先ほど天龍村の関さんからお話がありましたが、下伊那郡の一番南が天龍村、私どもは下伊那郡の一番北側になります。飯田市から車で20分ぐらい北になります。およそ1万3,500人の町です。私どもの町の売りは、まずフルーツです。「くだものの里」として大きく売り出して、果樹園ができてから、来年でちょうど100年ということで、来年、梨の古木を中心にしてお祭りをしていきたいと思っています。非常にフルーツ栽培が盛んでして、サクランボから始まりまして、桃、プルーン、ブルーベリーがありまして、ナシに入りまして、昔は二十世紀梨で非常に栄え、一代財をなした町でございます。そして、リンゴは、12月のふじまで、リンゴ狩りがこれからシーズンになるわけでありましてけれども、シーズン中には多くのお客様が見える町です。それらを生かして、6次産業の中でリンゴのワインや、乾燥させた果物の菓子類を作るなどしています。

また、清流苑という直営の温泉施設があり、その辺一帯が温水プールやマレットゴ

ルフ場、パターゴルフ場、テニス場、スポーツ施設などもあります。清流の片桐松川という川があり、ダムもあります。それから、今年、森林浴で「セラピー基地」の認定を受けました。それから、長野県から指定管理を受けております「青年の家」があります。これは生涯学習の場です。そういった、一帯を一つの観光資源と考えています。これから三遠南信自動車道、リニア新幹線が来るということで、交流人口は確実に増えてくる。観光というのが非常に大きなポイントになってくるだろうと考えております。

三遠南信ということですが、豊橋市や豊川市の三遠地域とこの南信州、これは当然のことながら違いがあります。いわゆる地形的な違い、あるいはそれぞれ風光、景色が違うわけで、それぞれがその違いをアピールすることが、この三遠南信を大きく売り出していくものになる。同じものをやってもしょうがない。当然のことながらできない。この南信州、合わせても飯田下伊那で16万人の人口で、そして、谷があり、段丘があり、山あり、川ありという、ここをどう生かしていくかということになるのではないかと考えております。

それから、観光に訪れる人たちは非日常を求めて来る。非日常を求めてくるということは、当然、食べ物はその地域独特のものを食べてみたい、それから、風景もその地域の独特なものを見てみたい、環境にしてもそう。そして、その地域の人たちと接したいという思いで来るのだらうというように考えるわけです。そうすると、今度はそれぞれの地域の中で旅行のプロデュースをしていく。地域をプロデュースしていく。そうした観光、着地型の観光とよく言われますけれども、そのようなものがこれからは大事だと思っておりますことと、それを実行するにはキャパの問題もある。そうす

ると地域で連携をしていくことも必要だと考えております。

コーディネーター／

一般財団法人阿智開発公社 羽場理事長

ありがとうございました。

B-1 グルメに始まります地域から自分たちの強みを探し出して売り出していき、これをブランド化していく。そのときに、この地域が海から山への、日本でも最もすぐれた海浜を持ち、また山岳を持ち、生態的にも非常に生物多様性のすぐれた、世界に誇れる自然を有しているわけで、隠れた魅力がいっぱいあるのであろうというように自信も持ちながらも、まだまだ未開発のものがあるのであろうというように思われるわけです。

あとお一方だけ資源の活用についてお聞きしまして、次のテーマに移ってまいりたいと思います。

喬木村商工会 藤本会長

喬木村といいますと、今話題のリニア新幹線が山梨から抜けてトンネルを出たところが喬木になりました。当初通る予定がなかったのですが、今、ハチの巣を突ついたような大騒ぎでございます。ありがたいやら迷惑やら。工場移転の関係だとかいろいろありまして、大変でございます。

私、個人的な話をさせていただきますと、旅行が大変好きで、先ほどおみえになったのは八戸の総合政策部長さんですね。八戸には50回ぐらい行っています。B-1 グランプリをとったせんべい汁ですね。真っ先に食べてみまして、最初はそんなにおいしくはなかったのですが、だんだん慣れてきました。おいしいものが各地にあります。先ほど松川町長が言われたとおり、その地域の人と触れ合い、おいしいものを食べたいという思いが私にも強くありまして、東

北は100回ぐらい行っています。ナビが要らないです。ですから3・11の震災のときには連休を利用して各ところをお見舞いに行きました。隣村の天恵製菓さんからしつかりお菓子を仕入れまして、70万円分くらいに安くしていただきました。有志と、有志といっても私の女房と2人きりでキャンプカーに積んでお見舞いに行ってきたぐらい東北が好きです。その魅力は素朴さですね。

私、温泉が好きで、よく飯田市のかぐらの湯に行きます。かぐらの湯に行くと、浜松ナンバーが一番多いですね。それから、三河ナンバー、豊橋、岐阜、名古屋、三重、非常に多いです。ありがたいことだなと思います。その方たちが三遠南信自動車道の矢筈トンネルを通過して喬木村へ来るわけです。喬木村には地域の有志がつくった「田舎道」という野菜とか産物の直売所、それから「楽珍農場」というものがあります。県外から来られたお客様が、そういう野菜の直売所回りをしていらっしゃる。非常に楽しんでくださるということで、ありがたいと思っております。

喬木村というところは、河岸段丘、日本でも有数の、有数というより、ほとんど唯一くらいのきれいな河岸段丘があります。天竜川がありまして、その平地、それから、その上に河岸段丘、その上に耕地と。喬木村は、「小さな拠点づくり」ということで、国土交通省が主催している、いわゆるその準備のための予算が全国で12地区が通り、そのための研究を今やっております。その講師として先ほどパネラーをしていただきました島根県中山間地域研究センターの藤山浩先生に昨日来ていただき、7時から講演をしていただきました。

そんな先生の見解の中にも、喬木は、段が4段あるとのことでした。それで、それぞれの良さがあるということでお話をいた

だきましたが、喬木の下段では、ご存じだと思いますけれども、イチゴ狩り。これはおかげさまで40年かけてブランド化できました。そのブランドで、喬木のイチゴは大体5割から10割ぐらい、よその産地のイチゴより高いです。イチゴの産地に、例えば、私、5、6年前に九州のイチゴの産地へ友達の八百屋さんのところへイチゴをお土産に持っていったら、「何だ、こっちのほうで産地だ。」と言われましたが、食べてみたら、「これはうまい。」となりました。東北だとか北陸に私に行きますが、そのたびに喬木のイチゴを持っていくのですが、待っていてくれるくらいブランドになっております。今年も1月から5月くらいまでイチゴ狩りのことをやっていますが、予約がいっぱいでお断りしている。「よそへご紹介させていただきます。」と言うと、「いや、喬木のイチゴが食べたくて予約をいれているのだ。」というように言われるくらい、おかげさまで40年かけてようやくブランドに育てることができました。

そんなブランドを利用しない手はないということで、私どもに「NPO法人たかぎ」という団体がございまして、そこで観光事業、あるいはいろいろなことをやっています。喬木には九輪草園だとか藤であるとか、そういったものの見物のためにお客様がたくさんお見えになります。そういうのをセットにして売ろうではないかということで、パンフレットをつくって応募しました。春は九輪草などを中心に村内を回る計画を立てました。秋はマツタケ狩りを中心にして、村内の紅葉などをご案内すればいいということでつくりました。募集したところ、来客数ゼロでした。良い話をすると非常に格好良いのですが、お客様をお誘いする魅力ある計画を立てるといことはなかなか大変なことだと、我々NPOの理事も非常に頭を痛めています。実際、どこ

の地域の皆様も成功例は多々あると思いますけれども、もっとあるのが失敗例だと思っています。

おかげさまに喬木はリニアの駅へも、自治体としては飯田市まで5分くらいで行ける場所です。それから、三遠南信自動車道もおかげさまで通り道になっております。インターも喬木の矢筈インターと喬木の氏乗インター、両方合わせて一つのインターということで、二つのインターができる予定になっております。いろいろなことで喬木を売ろうということではございますけれども、先ほど深津町長も言っておられました、最終的に、「では喬木だけでできるか。」という、それはできないです。やはりお互いが連携をとっていかないと、喬木村へ来て喬木村で帰るだろうか。先ほども述べましたけれど、かぐらの湯へ来て、かぐらの湯だけで帰るだろうか。そうではないです。かぐらの湯は、飯田市の方はあまり来られないですけれども、この辺で一番良い温泉だと私は思っております。うちから50分かかりますけれども、毎週日曜日には行っています。そのくらい良い温泉ですから、浜松の人たちもよく来てくれます。そして、温泉だけでは帰らないのです。飯田市も見たい。浜松市に行ってミカンを買おうと、「おっ、飯田か。かぐらの湯だ。かぐらの湯は私も行ったけれども、冬は怖くて行けない。」というように言われます。何が必要か。連携と、もう一つは、今、兵越の峠しか通る道がない。トンネルが必要です。飯田市と、それから、浜松市、豊橋市。愛知県と長野県と静岡県で協力してもらって、ぜひ青崩のトンネルを早くあけてもらいたい。トンネルさえあけば、全通しなくてもまだ来ていただけるのではないかとこのように思っています。

コーディネーター／

一般財団法人阿智開発公社 羽場理事長

大分熱がこもってまいりまして、秋ではございますが、温かくなってまいりました。

さまざまな資源を活用する例をお話しいただきました。そして、先ほどからのお話で、蒲郡市では例えば検定を使うとか、地域グルメの手法を使うとか、様々な方法によってご苦労されている。成功する場合もあるし、なかなかお客さんに来てもらえないこともあるということでした。

次のステージですが、それでは、どのようにしてファンをつかんでいくか。自分たちのブランドを定着させていくかということについて、テーマを移らせていただきたいと思います。

これについても、今、アンケート等で寄せていただいておりますが、ご意見・ご発表等いただける方はぜひ挙手をお願いしたいと思います。

豊橋市 佐原市長

先ほど来から、道路のトンネルをつないでくれというようなお話があり、国土交通省出身の私としては出る場所を間違えたかなと思いつきながらお聞きしておりました。また、豊橋のカレーうどんとか、私が紹介させていただき前に紹介していただいて、本当にありがたく思っております。

この「風土」のパネルの壁紙に当たるものを見てみると、先ほどの関先生もとても優雅な雰囲気、そして、今回も明るい雰囲気、これは明るく今日は話さないといけないという気になっております。

私どもの町、最初は、路面電車が残っているところは少ないということで、全国には多分市電が売れたと思います。そして、カレーうどんがひよんなことからテレビで取上げられて、ちょうどいいタイミングで売れて、そして、去年から今年にかけては

手筒花火ということで売れているわけです。いずれも地域のとても珍しいものをしっかりつかまえていく。地元の人にとっては、先ほどお話があったように、ごく普通だったことが、実は普通ではないのだということ、マスコミを通じて上手に紹介していただけたということが大きいと思うのですが、これは単に上手にマスコミを使ったと、こう思われがちなのですが、実は私どものところはちょっと経緯が違っていて、いずれのものも、ひよんなことからつながっております。

例えば、ここで今売れております手筒花火ですけれども、私たちは東京でプロモーションというのをここ数年続けていました。いろいろな形でやっておりましたが、手筒花火は大きなショッピングセンターに行ってイベントをかけさせていただくというお願いをしても、なかなかああいいう花火はやらせてもらえないものですから苦労して場所を探しておりました。ところが、テレビ番組の「世界の果てまでイッテQ！」のプロデューサー関係の人たちが偶然、8月の番組用に、「日本で一番危険なお祭り」というのを探しているという話があったらしいのです。私たちはその話があったことは知らなかったのですが、偶然東京で手筒花火をあげているときに、そのプロデューサーが見ていて、「これだ」ということで決まったという、簡単に言ってしまうとそれだけのことです。その間にはまだいろいろなことがあるのですが、いろいろなことがこうやって積み重なって、「好機をしっかりとつかまえていこうではないか。そのためにはしっかり普段から活動しておくことが大事。」ということをつくづく痛感させられました。

そんな中で、豊橋市を中心として、東三河全体の活動につなげていきたいということで、私どもは東京に事務所を持って、そ

の人間があちこちでプロモーション活動をしております。中心になっているのは、やはり観光のいろいろなところにイベントをとということで、イベントについては、やはり行政としてお手伝いをしていくということですが、それを支える、いろいろな場所、情報を提供していただく、そしてつながりを持っていくものとして、私どもは東京に「豊橋応援倶楽部」というものを組織して持っております。年に1回総会、そして、懇親会を開いているという組織ですけれども、何も豊橋出身に限らないのですが、地域の地元にはゆかりのある方たちに私たちの応援団になってもらう。いろいろな情報を提供していただいたり、こちらからの情報をそれぞれの人たちの持っているネットワークに流していただいたりするなどの、そんな仕掛けをさせていただいております。カレーうどんにしろ、手筒花火にしろ、マスコミに上手に乗せることができた、その背景には、そういった人たちの力が大変大きかったと思っております。

私どもの事務所、実はオープンにしている東京の事務所になっておりますので、最近では豊橋市の人よりも飯田市の人のほうがたくさん訪問されているという大変不思議な事務所になっておりますが、それはそれで、私たちも飯田市から持ってきていただいた情報を使えるということで大変重宝しております。

それから、豊橋市というか、東三河は、今、東京やいろいろなところ、外にネットワークを広めまして、それと同時に、私たちは東三河の中での交流を深めましょうということで、先ほど、オンパクのお話を小池さんからいただいておりますが、これも「みかわdeオンパク」となっています。

豊橋市というよりも東三河の広域連携の協議会の中で、できるだけ人の交流を広げたいということで私どもから提案して実際

にやっておりますのが、子どもが動物園に行ったり、いろいろな施設の博物館に行ったり、温泉に行ったり、地域にある公共で持っている交流施設、これを使うときに、子どもはみんなただにしています。子どもにパスポートを持ってもらって、それを示せば子どもはただ。大人はちゃんとお金を払っていただきます。そこで稼げるということがバックにあるのですが、そうすることによって、いろいろなところ、知らなかったものを知っていただく契機とする。そして、その体験を持って帰った人がそれを地元、そして友達に、場合によっては域外にしゃべっていただける、こんな仕掛けをしております。もうちょっと外に広がってもいいのかなと思うような仕掛けですが、今まで豊根村の人が豊橋市の動物園に来るということはなかなかなかったものが、何人かそれでも来ていただけるようになる。そんなことがあることによって、少しずつ中での交流が広がると思っております。

それから、もう一つは、やはり同じように人が動くような仕掛けを何とかしたいと思っております。これはまだうまくいっていませんが、豊橋鉄道の渥美線という線路があるのですが、これは自転車に乗っていけるという、自転車を持って乗れるという、そういう言い方が正しいですかね。「土日は自転車を持って乗っていいですよ」と鉄道で指定されています。これは、中部運輸局さんにご配慮いただいて、「観光地に行く列車だったらいいよ。」というその枠を使っていただいて、「余り観光地ではないな」と当時は思ったのですが、今はしっかり自転車で行って、危険な豊橋市内は避けて電車で行って、田原の安全なところから自転車で渥美半島を回っていただく、こういう観光に意外と使われています。思ったより使われていることにびっくりしました。これをぜひ飯田線に広げていただ

きたいと思って、今、運輸局にかけ合っているのですが、料金所、改札の問題などがありまして、物理的などころの障害もまだ残っている。ただ、私は鉄ちゃんですので、先ほど日本じゅう旅行されているというお話と同じように、日本じゅう鉄道に乗っていますが、飯田線というのは、多分いろいろな風景を楽しめる。風景の醍醐味から、ほんわかした風景から、いろいろなものを楽しめるということでは出色のラインだろうと思っています。これを上手に生かして、しかも地域をめぐってもらえるという仕掛けにするのは、ぜひいろいろなことをみんなと連携してお願いをすれば何とかかなると思って、つながりの強さというのをそういうところで発揮していったらうれしいなと思っています。

コーディネーター／

一般財団法人阿智開発公社 羽場理事長

私も飯田市の動物園の園長をしていた時代がございまして、豊橋市の動物園、それから、博物館も大変立派です。もちろん周辺の皆様の博物館も立派でございまして、これも連携して、今、展覧会を回しておりますよね。こういった連携をしていくということが非常に大事なかなと思います。ファンを獲得していくこと、連携していくことが大事なかなと思います。

時間もございまして、この連携について、少しお話も含めて最後のまとめにだんだんしていきたいと思うのですが、鈴木市長、いかがでしょうか。その連携について、お考えがあるというふうにお聞きしておりますが。

田原市 鈴木市長

一つ、最近の事例を報告させていただきたいと思います。

渥美半島、ご存じのように、本当に多種

多様な農業が展開されておりますが、昔、豊川用水ができる前は、畑は芋、麦、そして大根、米という形で、大変貧しいまちでした。田原市の藤七原という地区で今、まちづくりをやっている民間団体がありまして、その当時の芋で何とかまちづくりをしようと活動しています。たまたま松尾社という京都の分社がありまして、酒をテーマにして、最初どぶろく製造を考えたようですが、これは難しいということで、伝統ある、歴史のある芋を使おうということで、3種類ぐらいの芋を使ってやった結果、一番いい紅あずまという芋を使って焼酎を造ろうということになりました。

そして、そのときには土壌とかの関係で、豊橋技術科学大学の三枝先生にもご指導いただきながら取り組んでまいりました。ただ、田原には造り酒屋はありませんので、実は飯田市の喜久水酒造さんをお願いしました。アルプスのおいしい水を使って、それで焼酎を造っていただき、販売しようということで、この4月に初めてでき上がりました。何と2カ月で売り切れました。来年は今年の倍以上の5,000本造ろうということで、今、力を入れております。これが何ととっても、ロックで飲むのがおいしいです。普通は水で割りますけれども、ロックで飲むと本当にまろやかで、特に女性の方が大変喜んでおります。また、我々臨海部に60社ぐらいありますけれども、その臨海企業の懇談会のときに提供しましたら、これはおいしいということで、どこで売っているのかと大変好評でしたので、そういった面ではこれも三遠南信の6次産業化だというように思います。原料生産を田原でして、焼酎は飯田で造っていただいて、そして販売していく形です。

今回は、限定版で田原だけで販売したのですが、できれば飯田で売っていただくとか、そして、その焼酎の味に合うつまみを

開発するとか、そういう広がりができるといいと思っています。今年を持って来ていませんが、来年の三遠南信の交流会にはぜひ皆さんに飲んでいただきたいと思っています。

コーディネーター／

一般財団法人阿智開発公社 羽場理事長

実は市長さん、それをお尋ねしようと思って、今、マイクを握ったところなんです。今日は残念ながらということですか。

田原市 鈴木克幸市長

もう売り切れてしまいましたので。

コーディネーター／

一般財団法人阿智開発公社 羽場理事長

ありがとうございます。

大平村長、この連携について、お考えを。

天龍村 大平村長

事例発表でうちのおばさんが先ほど話をしたので、天龍村は何も話さんでもいいと言ってコーディネーターさんがこちらを向いてくれないので手を挙げ損なっておりますが、ご指名いただきましてありがとうございます。

大変参考になるお話をいろいろ聞きました。皆様のお話を聞いていると、自慢するようなことは柚餅子以外に余りありません。柚餅子は、私は最初から関連しておりました。ただ、問題は、こういったものができる由縁は、先に柚餅子ありではなかったもので、他のことから発想して柚餅子がこれだけになったということです。その間には大変、この組合の皆様の努力がありました。苦労もありました。本当は、私が教育委員会にいるときに、子どもたちのおやつを今は親が買い食いをさせていました。だから、買い食いはやめて、手づくりにしようと思

いました。その手づくりの品物を幾つもつくりました一角に柚餅子を置いたんです。たまたまそのときにおばさんたちが参加しておりまして、「これは何とかしたほうがいいのではないか」という発想から今に至ったわけで、初めからこういったものを産物にしようという考えで出るとなかなか難しいけれども、そういったヒントからこれまでにになったということです。もう長くお話しするともっといろいろありますけれども、そのかわり私もそれを計画した以上、いろいろ協力してまいりました。

それで、私どもも柚餅子と言いましたが、それ以外にもいっぱいございます。ていごなすとかいろいろ一生懸命やっておりますが、これは後から何とかしようと思って発見したものでございます。先ほど喬木の商工会の方は、下伊那にはかぐらの湯しかないような非常に強いお言葉がありましたけれども、いっぱい良いお湯がありますから、ぜひご利用いただきたいと思います。私どももお湯がございまして、実はそのお湯も宣伝の糧として、今、足湯を各地に運んで入ってもらっています。一番有名なのは名古屋のシティマラソンですね。あれにも足湯を運んでいます。先ほど動物園の話が出ました豊橋市の動物園。あそこには、もう常駐と言っではいけません、土曜、日曜、祝日には必ず足湯を出すということで、市長さんのご配慮で、あそこに常時運んで大変喜ばれております。南信州の温泉はどこにもありますので、ぜひご利用のほどよろしくお願ひしたいと思います。

そういった経過で、この県境というのは、地図の上では1本の線です。ところが本当は高いフェンスと同じなのです。なかなか交流ができない。道路も問題がございしますが、そんなことで、どうしても来てもらいたいということで、観光誘致に観光バスを誘致して、そして、飯田線もなかなか乗っ

てくださる人がないのでだんだん貧弱になっていき、今に廃止されるのではないかと憂いておりました。それを両方使って、観光バスを誘致するというので、今、一生懸命やっております。そういった意味で、今はJRのほうもいろいろ計画をしていただいて、新緑列車とか紅葉列車とか、いろいろそういった列車もつくりまして今やっておりますが、微々たるものではございますけれども、そういうつながりがあって初めて観光も、そして、こういったいろいろな産物もつながりができるわけですので、そんなことも含めて、いろいろな面で、この地域の皆さんが一体となってやる必要があると思う。

ただ、先ほど言いましたけれども、こういった機会にいろいろ話が出るのですが、それ以上になかなか積極的に話が進まない。今まで何回かこういう会議に出て、私どももやらない1人ですが、もっと具体的に実施するような方向づけをしていただきたいということがこの協議会で特にお願い申し上げたいことです。あとは言うところが出ますから言いません。天龍村もありますので、どうぞよろしく申し上げます。

コーディネーター／

一般財団法人阿智開発公社 羽場理事長

天龍村の村長さんに早くマイクを渡さなかったがために、大分勘気をこうむりましたけれども、大変すばらしいご指摘をいただいたかと思います。実は、私も最後に、もしご発言がなければ申し上げようと思ってここにメモしてございましたが、村長さんとも何回ここでお話をさせていただいていましてでしょうか。会議を積み重ねていって、すばらしい計画はできているのですが、そこが、今、村長さんがおっしゃったところだと思います。これを検証して、チェックして、そして、次の問題点は何だという

ことをきちんと明確にして、次のステップに確実に進んでいくと。議論だけではなくて進んでいくべきだというのが大平村長さんのおっしゃりたいことかと思うのですが、まことに同感でございます。まことによりご指摘をいただきましてありがとうございます。

コーディネーター／

一般財団法人阿智開発公社 羽場理事長

大変重要なご指摘をいただきまして、仲井様からまたお考えをちょうだいしたいと思います。

豊橋観光ボランティアガイドの会

「ほの国豊橋案内人」 仲井代表

この会を始めて今年で12年目ということで、年に2回ずつ行っておりますので、都合24回もやっているわけですが、それぞれいろいろなところへ行っております。特に南信地域は何度も来ております。この前、先ほど関さんにご発言いただきました、このゆべしの里ですね、坂部も行っておりますし、古くは、神様王国「遠山郷」、ここに行きましたし、あと大鹿歌舞伎にも2度ほど行きました。それから、あとは水窪の西浦田楽ですね。ここにも行っております。皆様方、行けば、「これはよかったな」ということで非常にお褒めいただきます。ということで、大体バス1台は必ず集まりますので、40人前後で行っております。

先ほど豊橋市長さんから豊橋のお話が出ておりましたが、やはり祭りとなりますと、豊橋のあたりはもう大変古い祭りです。具体的に言いますと、安久美の神戸神明社の鬼祭ですか。それから、あとは祇園祭になってしまいますので、そうするとやはり手筒花火になります。豊橋は今、52校区ありまして、半分以上の校区がそれぞれ煙友会を持ちまして手筒花火を非常に盛んにやっ

ております。

奥のほうの伝統ある祭りとなりますと、豊橋はその点は少ないのですが、今後については、やはりまとまってやっていくことが一番ではないかと思えます。

もう一個、豊橋の中で、今日は関係ないのですが、「ほの国豊橋案内人」ということでボランティアをしております。これにつきましても、今現在30人前後でやっているのですが、今度の日曜日なども広小路で歩行者天国をやります。このときにボランティアなどやらせていただいております。

皆様方でそれぞれ企画されましたものを、私どもは何とかそれぞれ皆様に広く売ってPRしていきたいと思っておりますので、いろいろありましたら、また今後ともいろいろなところで私も知識を得まして大勢の皆様方を連れていきたいと思っておりますので、ひとつよろしく願いいたします。

コーディネーター／

一般財団法人阿智開発公社 羽場理事長

ありがとうございました。

それでは、その民間の企画をされて、この地域に貢献されるというお立場から、矢澤様、よろしく願いいたします。

みらい企画「律」 矢澤代表

午前中に住民セッションが行われたのですが、そこの三遠南信住民ネットワーク協議会というところで、昨年来から「三遠南信ここが楽しい事典シリーズ」全5巻を各2,000部ずつ作成してきました。この編集をするに当たりまして、各市町村様から非常なるご協力をいただきまして、これが1巻の「祭り事典」です。祭りといいますので、やはりこれが超人気で、ほとんど完売に近い状況になっております。

そして、2巻目が、先ほど電車の話も出ましたが、飯田線と天竜浜名湖線です。私

は飯田の人間ですが、飯田線には余り乗らないのですが、それでもちょこちょこ乗るときに、この秘境駅のツアーがありました。普通では停車していただきませんが、ツアーのときだけは、その秘境駅といわれている駅におろさせていただいて、その辺の界限まで案内して下さって、これはとてもいい経験でした。それから、天竜浜名湖線。これもすごく雰囲気がいい電車だなと思いました。これを編集するがためにわざわざ行って、お金を落としてまいりました。そして、歴史の紹介。それでまた道ですね。

3巻目が、先ほどから皆様が自慢されています温泉を含めた「道の駅&温泉事典」です。これは温泉好きの方の実用本となっています。といいますのは、全館無料入浴券がついておりまして、当然、おきよめのお湯さんにもご協力いただいておりますし、南信州の温泉さんには多々ご協力いただいております。ということで、これも人気です。

4巻目が、今日のこの「風土」に特に関係のある「特産事典」です。残念なことに、焼酎だけが載っていなかったんですね。あと、お話しいただいているところが、皆さん、「ココイチ」というものを紹介いただきましたので、ほとんど掲載されております。

そして、最後5巻が「花街道事典」ということで、これはお花です。

それを全5巻つくりまして、今現在、ここにお見えになっている方たちのおかげさまもございまして、約6,000冊販売されておりまして、あと4,000冊残っておりますので、出たところに売っておりますので、ぜひお買い求めのほどよろしく願いいたします。

それで、ここに総計650点の素材があります。三遠南信全エリア650点の文化素材

を実は整理・網羅しました。先ほど関さんも発表されましたが、関さんがリーダーとなっている「南信州交流の輪」というのは私も会員なのですが、そこで、この中のものをきちんと勉強しようということになりました。しかも座学と現地学習しようというセットで、今年45名の参加者のもとに勉強を始めました。そこで、学習した中で、この地域の凄さに本当に改めて気づかされました。それは、いろいろな祭りの専門の先生にお聞きしました中でも、日本の祭りの原型がこの地に息づいているということです。それはまさしく関さんの住んでおられる坂部というところは、800年も昔から代々ずっと祭りの形や祈りを伝え続けているという、このすごさに、「800年っていつの世だったのかな。今はたしか平成だよ」と、そのようなことで、すごく感動するわけです。

それと、もう一つ着目したのが、実はこの4巻です。4巻のところですごいなと思ったのが、実は今日、市長さんもお見えになっていますけれども、豊橋カレーうどんのこのカレーうどんの底に何ととろろと御飯があったということです。私も女性ですので、食に関してはとても関心がございます、わざわざ豊橋市まで行って、二重底の豊橋カレーうどんを食べてまいりました。隣に皆様みたいに背広を着た立派な紳士がお二人いらして、ここに白いような前掛けをかけて、「豊橋といったら豊橋カレーうどんだな。」とか言いながら、カレーうどんのカレーを飛ばしながら食べていました。やはりそういうことってすごいなと感じました。

それから、「豊川いなり寿司」。これも紹介してありますが、このいなり寿司のバリエーションのすごさ。そして、「渥美半島どんぶり街道」。これは渥美半島全部がどんぶり街道です。そういうことのすごさ。

そして、「奥三河・戦国ぐるめ街道」。これは、織田信長と武田信玄の戦いのあった設楽原の戦い、あれを物語にして、そして、その国道151号でしたか、そこを全部、「奥三河・戦国ぐるめ街道」というふうにしまして、そういう面的な取り組みをしている。このあいだ、鈴木さんの話で、カレーうどんで、たしか何億円と儲けているという話を聞きました。そんなに売上が伸びていると。そして、全国にその地域をアピールしているという、そういう取り組みに実はびっくりしたわけです。そこで南信州も何か仕掛けたいと、そのように思いました。

そこで着目したのが、日本の原型をとどめている祭りとして、そして、食文化の融合です。この地域の強みが何といてもやはり祭りです。そこには信仰があり、物語があり、春、夏、秋、冬それぞれのいろいろな祈りがあります。先ほど関さんがおっしゃいましたように、神様、仏様は一番ぜいたくなものをお召し上がりになる。つまり旬のものをお召し上がりになるということです。ですので、国道151号は「祭り街道」と言われております。この祭り街道と食を融合させた「祭り街道弁当」を開発して南信州のブランドとするということで、祭りやその年中行事の食からヒントを得て、日本の伝統食として堪能していただく。そして、全国の人たちに日本の分野や味を楽しんでいただいて、とても幸せな気持ちになっていただく。そういった時間を発信していきたいということで「『祭り街道弁当』夢と感動のプロジェクト」を立ち上げ、先ほど関さんがおっしゃったように、新・地域づくりフォーラムを開き、勉強の第一歩としたわけです。

そして、プロジェクトは3年計画で、3年目に「祭り街道弁当」をぜひここで、関さん、頑張ってください、焼酎を飲み

ながら「祭り街道弁当」を食べていただきたい。そんなことを実現するために動いていきたいと思います。ここは、かつては「山の都」と言われたところでした。リニアが開通しようが、三遠南信自動車道が全通しようが、ここは山の都として、もうそのときには栄えているようにしたい。そういうことを夢見て、このプロジェクトに向かって頑張ってもらいたいと思います。

コーディネーター／

一般財団法人阿智開発公社 羽場理事長

ありがとうございます。

関さんといい、矢澤さんといい、すばらしい女性パワーに圧倒されておりますが、本当にすばらしい発表、ありがとうございました。

単なる出版ではなくて、この地域を全部網羅して、地域の文化を文化資源として売っていかうというすばらしい試みだというふうに理解しているところでございます。

まだまだ話したい、話し続けたい、あるいは議論したいところではございますが、大体お約束の時間が参りました。簡単にまとめる方向に移ってまいりたいと、そんなふうに思います。

様々な意見が出されました。アイデア、地域のある宝を工夫して、見つけ出して、加工して、そして、人、心で売っていくということ。あるいは検定を、あるいはB級グルメのそういった仕掛けのアイデアを出して売っていくということをご報告いただきました。

今後、今までの過去の集積は、最初に私、お示ししたのですが、この資料集の50ページにあるような形で、全体の戦略・戦術が描かれております。これを具体化するのが今日の個々の話だろうというように思います。設計図はできておりますので、これに沿って、今日出たようなお話をぜひまた別

のところで体系化するような作業をしていくことが大事ではないかということが、一つ目ではないかと思います。

それから、二つ目ですが、それを具体化していく、そのメニューをプロモートしていく、プロセス設計していく必要がある。

1年目は何を、2年目は何を、3年目は何を、ということかと思えます。

もう一回整理すると、1番目は、シナリオを整理して書くということ。2番目は、そのプロセスの工程表をつくって攻めていくということかと思えます。

それから、大平村長さんから思いを込められてご指摘がありましたように、話は大体出尽くしているのではないかということ。それらをきちんと見直して、チェックをして、本当に実行性のある計画を立案すること。内容がまずければまた改善して、そして、それをさらにもう一度トライしてみるという、こういうチェック・アンド・トライの動きをそろそろする必要があるのではないか。次のサミットには、ぜひそのような内容が報告され、それをもとにまた進んでいくということが必要ではないかということが大平村長さんから提案されました。

大まかにそのような内容でまとめをさせていただきます。最後になりますけれども、九州経済フォーラムの西座様が今日はゲストとして来てくださっていますので、わずかな時間しかございませんが、ご感想、それから、ご助言・ご指導をいただければと思います。

よろしく願いいたします。

九州経済フォーラム 西座理事

実は先週、九州の宮崎県のある町に風土ビジネス推進協議会というものができまして、そこのアドバイザーとして来てくださいということを言われまして、つい先日、私、第1回目の会合に行ってきました。そ

こで出た意見は、「有害鳥獣の処分をどうするか非常に困っている問題だ」ということでした。これはシカ、イノシシ等々でございました。このシカを、要するに処分するわけですが、その後の処理として、食べることを考えましょうということになりました。それで、ちょうどワインセラがその町にはあるので、ワインに合うシカ料理をして、そして、これで売り出していこうということになりました。ただし、ここには一つ問題があります。「独自でやるのは、これはだめだ。やはり県境を超えて、その地域のエリアでネットワークを組んで、駆除したものを一緒に地域の食べ物として売り出していく、こういう連携が大事なのではないのでしょうか。」という助言をさせていただきました。まさに、その地域の風土、この地域のものとしての宝物をつくっていけばいいのかな。今日お話を聞いていても、非常にたくさんのその地域のことをやられているので、非常に私も参考になりました。駆除したシカを食べるという変な発想で非常に申しわけと思うのですが、そういうことをつい先週、話していただきましたので、ご報告ということにかえさせていただきます。

コーディネーター／

一般財団法人阿智開発公社 羽場理事長

ありがとうございました。

閉じる前に、佐原市長さん、前回のお話の中で、「良いお祭りはあるけれども、呼んでくれないと行けないよ。」というような冗談めかした話があったかと思うのですが、各地のお祭りの首長レベル、あるいは議員さんレベル、民間レベルの交流というのはその後どうなっているのでしょうか。

豊橋市 佐原市長

お祭りは多分、わざわざ呼ぶという仕事

はしていませんが、例えば、愛知県でいいますと、東栄町の花祭が一番歴史ある祭りという意味では有名ですが、これは、もう一方では、私たちがわざわざ行けない、行っても入る場所がないぐらい有名になってしまったりしているということがあります。それで、何を今やっているかということ、お祭りもそうですし、先ほど出た歌舞伎などもそうです、交流という形のもの上手にできるというように思って、今、歌舞伎は三遠南信のふるさと歌舞伎というのをちょうど紹介させていただきたいですが、今年順番で来月17日に豊橋であるのですけれども、ぜひ、お弁当を試作品でもでもいいから持ち込んでくれたら、うちはそういうのを今、専らやっています。

お祭りは、多分声かけとか情報提供はすぐくされていて、あとは、首長さんたちはなかなか行けていない。時間がとれない。先ほどお話がありましたように、夜中徹してというお祭りが多いものですからなかなか行けないという状況だと思います。私自身も、花祭は豊橋市内の花祭しか見ていない。東栄町出身の方たちが集まっている町がありまして、そこのお祭りの花祭ぐらいしか行けないので、なかなか実際は行けていないです。発言だけして実施していないという、先ほどの大平村長のおしかりをまさに受ける、そんな状態でございます。

コーディネーター／

一般財団法人阿智開発公社 羽場理事長

政でお忙しいということですね。

豊橋市 佐原市長

そういういい政だったからいいのですけれども、そうではないことも多くて、残念ながらそこまでいっていない。ただ、地域間の連携というのは、そのお祭りにかかわらず、先ほどありましたように、こういう

発言をいろいろなところでさせていただいたり顔見知りになりますと、天龍村の村長さんが来られて、「豊橋市でこんなことができんかね。」という相談があったり、根羽でもあったりしておりますので、そういう意味では、三遠南信の交流があるおかげで顔見知りになったいろいろな人たちが、それぞれのネットワークを使って上手に発信をし始めているかなということは強く感じております。

コーディネーター／

一般財団法人阿智開発公社 羽場理事長

ありがとうございました。

最後に佐原市長さんからお言葉をちょうだいしたのですけれども、このフォーラムを通じて非常につながりが感じられる。要は、親しみを感じられる。それまで地図上でもどこにあったかわからなかった町や村や市が何とかイメージできるようになってきたというようなことで、この20年に及ぶ動きが着実に効果をあらわし、成果を積み上げているものというふうに確認をしたところです。

本日のまとめにつきましては、先ほどさせていただいたような三つの項目でまとめをさせていただくところでございます。

皆様の大変すばらしいご発言、ご意見、ご議論をちょうだいしまして、大変ふつつかな司会で滞るところもありましたが、お約束の時間どおりにすべての会議、討議を終えることができました。

パネリストの皆様、それから、西座様初めといたしまして、会場にお越しになってくださった皆様に感謝を申し上げまして、この「風土」の会の分科会を閉じさせていただきます。

ありがとうございました。